

生化学・免疫インテグレーション装置 (AlinityC2I) を導入して

◎澤口 諒¹⁾、遠藤 俊彦¹⁾、伊藤 勇気¹⁾、羽切 政仁¹⁾
一般財団法人 芙蓉協会 聖隷沼津病院¹⁾

【はじめに】 一昨年、当検査室は省スペース化・業務の効率化を目的とし、生化学・免疫インテグレーション装置を導入した。今回、導入した事によるメリット・デメリットを報告する。

【方法】 既存の装置であるベックマン・コールター社製生化学自動分析装置 AU2700 (以下 AU2700) 2 式とアボット社製全自動化学発光免疫測定装置 ARCHITECT i4000SR(以下 ARCHITECT)の使用実績と、アボット社製生化学・免疫インテグレーション装置 Alinity C2I (以下 Alinity) 2 式の使用実績を比較した。

【結果】 メリットとしては、省スペース化による業務の集約化、試薬補充やメンテナンス業務の負担軽減による業務の効率化が挙げられた。

従来の装置と比較して設置面積を 35%削減出来たことで機器配置変更を行い、検査導線がよくなったことや余ったスペースに分注器を導入したことにより、オペレーターを 2 人から 1 人にすることができ、業務の集約化に繋がった。

試薬に関しては、従来試薬ボトルから汎用ボトルへ手分注を行っていたが、専用カートリッジになったことで分注作業がなくなり、試薬補充にかかる時間が短縮された。また、ヒューマンエラーのリスクが軽減された。

メンテナンス面に関しては、日々のメンテナンスが短縮され、業務負担を大幅に削減することができた。

一方、デメリットとしては、専用試薬によるコストアップと、インテグレーション装置による機器故障時の停止が挙げられた。特に故障時に関しては、Alinity の生化学・免疫ユニット両方が操作できなくなることが大きな障害となった。【考察】 Alinity を導入することにより、業務の集約化と効率化が得られたが、デメリットである故障時 (=機器停止時) における、各オペレーターのスキルや対応方法が統一できていないことが課題となっている。今後は故障時対応マニュアルを作成するとともに、対応訓練を実施することで、故障時における診療への影響を最低限にとどめるように努めていきたい。

連絡先 : 055-952-1023 (直通)